Osaka Shoin Women's University Repository

資料紹介

大西家蔵番外謡本（五）

西畑　実

生捕盛久

ワキ詞「是ハ丹州成相寺の住僧にて候、爰に平家の一族主馬の判官盛久ハ、一門没落の後当寺を頼ミ御忍ひ候、日比他事なく御入候間、ひと先頼まれ申て候へ共、朝敵の御身にておはしまし候へハ、僧躰の儀に以合申さぬ事なから、此由都へ注進いたし盛久を生捕申、後難をのかれ申さはやと存候　男「いかに案内申候　ワキ「何事にて候そ　男「是ハ土屋の三郎よりの使にて候　ワキ「土屋殿よりハ何の御使にて候そ　男「さん候平家の侍主馬の判官盛久、当寺に御しのひ候由註進にて候間、必定にて候ハ、只今討手を御下しあらふする由の御事にて候　ワキ「音たかふ候、人もこそきけ彼盛久ハ、落人と申せ共、大剛の勇士にて候へハ、早速御追罰あらん事叶ふましく候、愚僧か存候ハ、興を催し一献を進め、酔臥給ふ所を討捕給ふ共、又搦捕候ひても然るへくと存候　男「誠に是ハくつきやうの御事にて候、宜き様に御寺僧を頼入候　ワキ「心得申候　シテ「夢中に道有て塵埃をへたつ、実やそこ共しらざりし、下へ山に隠れ野に臥て、一身の置に所なし、天ハ高しといへ共、憚りあれハ跼め、地ハ動ぬに蹐す、荒浅ましの身の果や候　ワキ詞「いかに盛久に申候、今日ハ雨降徒然に候間、徒然を晴させ申さハやと存、酒肴を持せ参りて候　シテ「御志ハ有かたふ候、我かく深山の埋木となり、花咲春もなき身なから、いつを待てか此所に、空然として暮し候事、御心中も面目なふこそ候へ　ワキ「是ハ盛久の仰共覚す候、譬へハ越の勾践ハ、呉の擒となり、土籠に入て、十二年の春秋を経しも、時節を待て運を開く目下頼朝ハ、廿四年の星霜を送り、さしも無双の平氏を亡し、天下を治め給ふ事、是遠からぬ例なり　上へ構ておくれ給ふなと諫め申せハ　シテ詞「盛久も実理りと黄昏ハ、上へ雨音そへてつれ〴〵に、なかめかちなる春の空　上同へ彼楽天と聞えしも、〳〵、琴詩酒を友となし、酒功讃を作り実妄執の雲霧も、呑ハ晴ると菊の酒一二ツと重れハ、

Osaka Shoin Women's University Repository

九献にハ過じと覚たり　下クセへ然るに平氏、世を取て廿余年、一門かとをならべ、累葉枝をつらねつゝ、時めきたりし春の園、栄花の花も散〻に成身の果そ恨めしき　シテ上へ誠に槿花一日の、同へ盛の内か夢の世に、幻のしらさりし、世の習ハしこそはかなけれ　ワキ詞「誠に時節到来の世の習ひとて、さしも実さかりの門も亡びぬる、御身の果そいたハしき、さハ去なから人心よハくて叶ふまし、いかに盛久、盛久ハ平家譜代の侍武略の達者、殊更乱舞勘能の由田舎迄も隠れなし、かゝる時しもあらすして御所望せん事かたかるへし、唯一指御まひ候へ　シテ「盛久かゝる身となりて、舞まふ事いかゝなれとも、又情ある人々の、上へ心をいかて破らんと、扇追取立あかり、いさましからぬ舞の袖かな　下同へ鳴ハ瀧の水マイ　シテ上へ鳴ハ瀧の水　上同へ日ハ照ともいつもとふたり常にとふたり酌盃の、数重なれハ、前後を亡ずる足もともよろ〳〵と弱きに弱き、柳の糸の、夜の臥どに入にけり〳〵　シカ〳〵　ワキ「酔臥たるを幸に、〳〵、竊にしのひ立よりて、太刀かたな奪取り、さし足してそ帰りける〳〵　ヨセテ一セイ「白波を、余所にやきかん廣原海の、深き心ハ、有物を　ヨセテ「是ハ鎌倉殿の御内に、土屋の三郎也、いかに此寺の内に主馬の判官盛久の御入候と承りて、御迎に参りたり疾々御出ましませと声々に呼ハりて、上へ庭上さして乱れ入　シテ詞「盛久おとろき立あかり、枕に立たる刀を見れハ、太刀もかたなもなかりけり、こハ如何に南無三宝、さハかり盛久は平家の勇士成者を、たはかりけるこそ無念なれ、爰こそ名を得し日比の早態、すハ見よと大勢に掛入て、手比に近付し敵の刀を奪取、上へ是見よ得者ハ爰にあり　上地へ寄手ハ是を見るよりも、〳〵、我討とらん我先にと、いさミかゝれハ、盛久其時、太刀真高に指かさし、しゝふしこらんにゝ、飛鳥の翼り波返し、鶴翼秘術を尽せし所に運尽弓の、矢一ツ来って、高股に立けるを、抜んと思ひはしり帰って、うつむきし所を、得たりやあふと打逢て、組付者をハ取て投捨、〳〵、樊噲かいさミをなせとも多勢のかたきに為方もなく、生取の身となりし、心の内そ無念なる〳〵

ツレ女詞「是ハ浜田の何某殿に仕へ申者にて候、扨も頼ミ奉りし人の北の御方ハ、師の局と申て禁中第一の美人にて候ひしか、今ハ浜田殿の妻となり給ひて候、爰に又左エ門尉政長殿と申て、隠れなき色好の御座候か、有時帥の局大覚寺殿へ御趣の砌、政長殿かひま見給ひ、数々の玉章を送り申され候へ共、元よりま〻ならぬ御身なれハ、更、御聞入も御座なく候程に、政長殿為方なき余りにや、情なくも浜田殿を讒し給ひ、流人の身となし給ひて候、北の御方御歎き大方ならす、今ハ早思ひの床に臥給ひ、御命もあやうく見えさせ給ひ候、誠に御痛しき御事にて候、けふハ又雨中御つれ〳〵に御座候半程に、参りて御様躰をも窺ひ申、御心を慰め申さハやと思ひ候　シテ下へ命只心に叶ふ物ならハ、何か別れの、悲しかるらん上へ数々に、思ひ思ハす、とひかたみ、身を知雨ハ、降そ増れる　ツレ詞「いかに申上候、侍従か参りて候　シテ「侍従と申か此方へ来り候へ　ツレ「けふハ物さひしき雨の中、御心ちハ何と御入候そ　シテ「さなきたにいと、苦しき枕の上に、窓打雨の音高く、上へ夢も結ハぬ思ひ寝

恋妻

浜田トモ

Osaka Shoin Women's University Repository

の、つれなき命のおしかるも、あかて別れし我妻に、又も逢瀬の頼ミ哉　ツレ詞「実御歎き尤にて候去なから、御心易く思召れ候へ、殿ハ御身に誤りなき通りを君聞召及ハせ給ひ、頼て御帰京有へきとの御事なり、唯御心を取直させ給ひ、御薬をも用ひ給ハヽ、末ハ目出度御対面にて候へし　シテ「嬉敷人の詞かな、科なき妻の左遷の罪も唯我ゆへと思へハ猶も、上へ五のさハり重きか上の、身の後の世もおしはかられて、やる方もなき小車の、めくりあひなハ浮事も、晴て行なん心の月の、曇らぬ御影頼むなり　下同へ実や田面の鴈金も、花を見捨て行空の、雲井遙に立隔つ、妻の音信もなき世の中そ悲しき　上哥同へ来ぬ人をまつほの浦の夕なきに、〳〵、焼や藻塩の焦れ行、浮舟のよるへも涙の袖そいとなき、よしやしはしこそ、岩にせかるる瀧川のわれても末に逢瀬の頼ミをかけて木綿四手の、神の恵ミの明らかに照させ給へ我心〳〵　ワキ次第へ替る浮世もかハらさる、〳〵妹背の川そ頼もしき　ワキ詞「是ハ浜田の何某にて候、扨も我由なき人の讒奏により遠流の身と成て候へ共、我身に誤りなき旨を君聞召分られ、此度御免を蒙り本領に安堵し、唯今都へ上り候、急候程に、是ハはや都に着て候、是成館か我家にて有けに候、浅増や我流人の身となれハ、住越宿もあれ果て、庭も籬も蓬生の、昔語も思ひ出られ、目も当られぬ有様哉　サシへ実や風碧瓦をひるかへして雨垣を摧き、池ハ水草に埋れて、蛙あらそひ鳧も、所を顔にうそふきて、誠に気疎有様哉、詞「いかに誰か有、浜田こそ此度御免を蒙りて罷帰りたるそ此由申候へ　ツレ女「や、是ハ目出度御事にて候、急て此由北の御方へ申さうするにて候、いかに申上候、殿の御帰りにて候、急て御対面候へ　シテ「何殿の御帰りと申か、いつくに御渡り候そ　ワキ「なふ某こそ帰りて候へ、何とてか様に御やつれ候そ　シテ下へ実や何事もへたてぬ中といひなから、かく浅増くおとろへし、姿見ゆるも恥かしさよ、去なから君を思ひの涙の雨に、花の袂ハ朽ぬとも、情の色ハうつろハぬ、心の内を思ひしれ　ワキ詞「実々嬉敷仰かな、我も年月思ひの外につらき配所の身と成しも、花の袂に置露の、むすふ契りの色かへぬ、　上カカル へ心の科と夕月の　シテへ都隔つる遠嶋に　ワキへうき春秋を　シテへふる里に　上哥同へ浅芳か原とあれ果て、〳〵、昔忍ふの軒端もる、月ハ気疎影なから替らぬ色そ嬉しき、実や逢瀬ハ久堅の、雲井とゞろく鳴神も、思ひし事ハさけぬと聞に付ても、頼もしや〳〵　クリ上同へ実や臂上の蜥蜴色変せす、鹿葱花開て更に、萎む事なし　シテサシへかの唐土の貞女とやらんハ、両夫にまミへん事を恥て、下同へ思ひの渕に身を沈め、桑を拾ひし女ハ妻の、不義を恨ミて身を失ふ　シテ下へ是皆直成貞節の、詞へ心を見する、例とかやクセへ爰に武蔵の守、師直と聞へし、いミしき人の有けるか、其比出雲の国の守、塩治の高貞と云人の、妻ハ世上に隠れなき、美人の聞へ有しかハ、師直かいま見て、わりなく思ひ染衣の、色に出行恋心、物や思ふと人の問迄現なき、涙の床に起もせす、ねもせて夜半の明石潟、汀に求めし鴈金の、翅に付て玉章の数重なれと徒に、ふミ返さるゝ丸木橋、落る袂の涙こそ、恋敷人の形見なれと、思ひかへして返すたに、手にふれけんと思ふには我文なから、うちもおかれすと読やる言の葉にめて、　シテ上へ只小夜衣とのミ、同へ返しけれハあだ人の、こハそも何と夕貝の空目も頓てくり返す、

Osaka Shoin Women's University Repository

心惑ひて事とへハ、さなきたに、重きか上の小夜衣、我妻ならぬ、妻な重そと読し歌の心そと、聞よりいと、あくかれて、飛立のミか恋心、情もしらぬ武士の、さかなき中言によりて、浮名高貞諸共に、身を捨し世語の哀今更にしられたり 上ロンギ地へ去なからそれハ昔のあだ人の、浮身を捨し物語、是ハ二度古里に帰り逢瀬そ嬉しき シテ上へ嬉しきを何に譬ん夕暮の、月も晴行思ひ妻友に片敷袂哉 上同へ袂も袖も打かほる、古き軒端の梅の花 シテへ今悦ひの 地へ色はへて、立まふ姿も花やかに、雪をめくらす小忌衣、返す心も現なや シテ下へしつやしつ マイ ワカへ賤やしつ、賤の小手巻繰返し 上同へ昔を今に返す袖かな、〳〵返す袖哉 シテへ返す嬉しきあふむの袂、下同へ〳〵、人の見る目もいとハぬ中の、思ひも今ハ荒磯嶋津鳥、うきを忘る、都の春の、月は昔にかハらぬ閨吹松風に浮世の夢も明方の空の、空言なかりし誓の詞空言なかりし誓ひの言葉のする、頼もしきちきりかな

更科

次第へ今日思ひ立つ旅衣、〳〵木曽路にいざや急がん ワキ詞「か様に候者ハ、本ハ信濃の国更科の者にて候か、万浮世の墓なき事をくハんし、妻子捨都に上り、東山黒谷源空上人の弟子と成、か様の姿と成て候、我善光寺への志し有により、信濃の国に下り、余所なから故郷をも尋はやと存候 道行へ住馴し花の都を立出て、〳〵、うき音に鳴か賀茂川や末白川を打渡り、音羽の瀧をよそに見て、近江路過て程もなく、信濃の国に着にけり〳〵 詞「急候程に、是ハ早善光寺に着て候、寺中へ申御堂にて一七日説法を致はやと存候、いかに申候 シカ〳〵「何事にて候そ ワキ「是ハ都より下りたる僧にて候、法界利益の為御堂にて一七日説法仕度候 シカ〳〵「夫こそ有かたふ候へ、聴衆も参詣有へく候間御説法遊され候へ、いかにめん〳〵都方の御僧の御説法を御宣候間皆々御参候へ シテ一セイ上へいかにあれ成道行人、都への道教てたへ、詞「何物狂とや、上へ実断や我なから、さしも気疎姿そや 上へ恋衣、きても見よかし我妻の 上同へ行衛も遠き、都路や シテサシ上へ是に出たる物狂の、故郷は当国更科の者、去人の妻にて候ひしか、只かり初に出給ひ、都へ上り給ひしか、かつて音信ましまさず、風の便の伝聞ハ、世を捨人と成給ひ、都東山とやらんに、浮世をいとひ住給ふと、聞より心乱つ、、責て替れる姿をも逢見ばやと思ひつ、、かやうに狂ひ出たるなり 下哥「あら恥かしや我姿人に面をさらしなや 上哥「姨捨山を跡に見て、〳〵、猶行末も其原や、臥屋に生るは、き、のありとハ聞どあハぬとハ我等か妻の、行衛かな〳〵 詞「何と善光寺にて御説法の有と申か、参りて聴聞申候へし シカシカ「如何に狂女御身ハ何くの人なれハかやうに狂ひ出たるそ シテ「さん候我ハ当国更科の者にて候か、二世と契りし我妻に生て別れて候程に、か様に狂ひ出て候 シカ〳〵「荒痛ハしや候、旅の御聖の御説法候間静に聴聞申候へ シテ「荒有難や候、更ハ是にて聴聞申候へし ワキサシ上へ既時刻に成しかハ、導師高座に上り、発願の鐘打鳴し、謹ミ敬白一代教主釈迦牟尼宝号、三世の諸仏、十方の薩埵に申てまうさく、惣神分に阿弥陀仏名 クリ同へ夫

Osaka Shoin Women's University Repository

受難き人界に生をうけ、逢難き如来の仏教に逢奉り、生死の紲をきらさらん ワキサシ 今此生涯を深くいとひ、彼国に生を受んと、願ひを深くかけ給ひ 同 糸も弥陀の誓願、只一筋に我名を唱へなは、臨終にハ必来迎有て、安養界に救ひとるへしと、誓ハせ給ふそ、有かたきクセ 然れハ、末法のすへにハ諸経委く滅しなん、され共仏愛愍を垂給ひ、弥陀一教を残しつゝ、悪人女人を助け給ハん御誓願、頼もしく思しめせ、口にとなふる三昧なれハ市中にも又道場あり、高き賤しき智者愚者も、唯頼むへし往生ハ、一念十念ひとしくてワキ上 有難や 助け給へあミたふと、同 となふれハ仏も、我もへたてハなかりけり、爰に居なから極楽の聖衆の数に入ぬれハ、蓮の花ハ生出て、生るゝ人に迎ひくる、有かたき御利益、頼もしく思ひつつ念仏を唱へ給へやワキ詞「いかに狂女、おことハ落涙し候か、あらやさしや、唯今の説法を聞入て有よな シテ下 荒有かたの御教化やな、かゝる数へを聞なから、おとろかぬこそ愚なれクセ 悲しきかなや悪業ハ山よりもたかくせこんは塵程もたくハへす角さんつの古郷にかへつて本願の台にいたらさらんハ歎の中のなけきかなしミの中のかなしミたり草露こと〳〵く春をむかへてハ花葉共にほころひ松風にさきたつ山桜ハはやく無明の夢覚月に落くる暁ハへつりの雲にやしつむらん花橘の香をとめて昔の人を尋れハしんそいくはくかさりぬかゝる思ひのふかみ草いもとわかぬるとこ夏の花一時の夢の世としらてや人の迷ふらんワキ詞「ふしきやな是成物狂を見候へハ、古郷に捨置し妻にて候ハいかに、思ひのあまりに狂人と成て候、一度切たる紲にて候間名のらじとハ思へとも、か様に落ふれて候ハハ、定て仏の道をも失ひ候へし、名のつて悦ハせ、仏道に引入はやと存候、いかに狂女おことを見候へハ古しへ見知たるやうに候、若更科の人にて候か シテ「あら思ひよらすや、お僧ハ何くの人にて候へハ、我国里を尋給ふそワキ「是こそ更科の何某かなれる姿よ見忘れたるよな シテ「何更科殿とや、下へ 是ハ夢かや現かや、実も姿ハかハれとも、馴にし妻のおもざしと、恨めしなからなつかしや、御身を尋出てこそ、かやうに狂ひ侍ふなり 上ロンギ 同 実断や今迄の恨ミを忘れけふよりハほたひの道に入給へ シテ けふの御法を聞よりも、我もさこそと思ふなりぼたひの師と頼むへし後の世たすけおハしませワキ上 此世ハ夢のちぎりなり、安養界に行生れ、無量寿仏の御もとにてなかき契りをなさふよキリ 同下 実此上ハ諸ともに、仏道修行を行ひて、口に念仏怠らす、仏果の縁と成にけり、是もおもへハミた仏の誓ひそたつとかりける誓ひそたつとかりける

十番切

次第 枝を連ぬる所縁にや、〳〵、人目の関を忍ふらん サシ女 是ハ二の宮と申女にて候、扨も曽我兄弟の人々ハ、親の敵討ん迚竹馬の昔今迄も、野に臥山にやどし、心を尽し給ひしか共、今迄本意をも遂給ハす、けふ御狩場の御供に紛れ、ねらひ給へる御心の内推量り参らせて、童も逃れぬ中なれハ、御宮仕への隙を窺ひ、人々を導き申さんとて忍ひて是迄参りて候、何国にかおハすらんと、彼方此方へ尋行、心の内そ悲しけれ 二人 兄弟ハかく共しらて、仮屋の前にイ ハ女上 荒嬉しやされハこそ、此方へ入せおハしませ、扨

Osaka Shoin Women's University Repository

国、の武士の、幕を委く教へ参らせん、詞「御覧候へあれ社御尋候幕そとて、懇に教へつつ、下へ命めてたふましまさハ、又こそ御目に懸らめと上哥同へ涙と共に立別れ、〳〵、稲葉の峯に生る、松とし聞ハ今一度帰りこんと約束し別れ〳〵に成にけり〳〵女中入 十郎詞「かくて兄弟二の宮か教へにより思ひの儘祐経が仮屋へ忍ひ入、かしこを見れハ祐経ハ、前後もしらす臥たり、助成五郎に申けるハ、親の敵に逢事ハ、優曇花よりも猶稀也、年月心を尽せしに唯今晴せ時宗と、兄弟目とめを見合つ、、悦ひ勇ミ立たりけり時「辞々寝入たる者ハ死人に同じ、目を覚させ心の儘に討はやと存候十郎「実ニ我等も左様に存候、いかに祐経大事の敵を持なから、不覚也早起よと、枕をはたと蹴上れハ祐「祐経驚き目を覚じ、心得たり逃さしと枕に有し太刀追取、立上らんとせし処を十郎「兄弟左右より走り懸り上同へ此年月の妄執今宵こそはらせ、時宗よとて共に敵を討たりけり時「其時五郎立帰り、いかに祐経御へん我に得させし此太刀、唯今返すぞ受とれと、心もとに指通して、大音上て名乗様上カカル へいかに御前の面々慥に聞、曽我兄弟の者共、年来の親の敵、工藤祐経討取たり、富んと思ふ人々は、おり合給へとよハ、りたり上同へ宿直の人々周障騒き、〳〵、すハや夜討ハ曽我兄弟そ、起あへやつと、云声に、弓よ長刀太刀と刀と、前後を失ひ、上を下へと返しけり上同へされ共御前の人々ハ、〳〵、我も〳〵と切て出、面もふらす、懸りけれハ、元よりも兄弟ハ命も惜ます、切て廻り、兄弟か手に懸て、矢場に七騎、討けるを、すかさす追詰懸りけれハ、今ハ命限りの討死と、二王立に、立双へハ、御所の武士ハ、合せ兼て、其間遙に引たりけり新かい下へ懸りける所に、新賀井と名乗て下同へ祐成に討て、懸りけるを、得たりやあふと散〻に、た〻ミ懸られ叶ハしと思ひけん、小柴垣を、押破ッて尻這して逃入けれハ、時宗ハ逃さしと、御前共憚らす逃行敵を目に懸て、跡を慕ふて、追て行中入 新詞「然所に新田の忠綱ハ、君の仰に隨ひ仮屋の警固せしか、上カカル へミれハ十郎助成、打物ぬひて懸来り、御前をさして討入を上同へとめんと思ひ打合けるか、むさんや助成ハ、宵よりつかれし事なれハ、荒手に責立られ請太刀になって弱り行を、た〻ミ懸て、討臥つ〻、太刀押拭鞘にさし心しつかに立帰る。無慙成かな助成は、臥たる枕より、いかにや忠綱、我身逃れぬ中なれハ、他人の見る目恥かしや、早々御辺手に懸て、後の世とひてたひ給へ、時宗ハかく共、しらて便りや失ハん、死出の山、三途の川も一所にと、誓ひし事も徒に、早是迄そうてやとて南無阿弥陀仏と合掌す、うつれは替る世の習ひ、互に隔ぬ中なれと、武士の情なく、きらて叶ハぬ輪廻の紲、南無阿弥陀仏と、首討落し取持て御前へ逃こそ参りけれ〳〵イニ なむあミた仏とあへなく首を打落し御前へ行こそ、無慙なれ〳〵

袖の湊

次第へ山また山や浦伝ひ〳〵、浮世の旅に出ふよワキ詞「是ハ諸国一見の僧にて候、我いまた西国を見す候程に、此度思ひ立西国行脚と志し候道行へ世の中を渡りくらへて波もなき、〳〵、阿波の鳴渡を打過て末遙々と行程に、心築紫の果やらん、しほれそ増る旅衣、袖の湊に着にけり〳〵詞「急候程に、是ハはや筑前の国袖の湊とか

Osaka Shoin Women's University Repository

や申候、荒面白の浦の名や候、暫此あたりに休らひ、猶々名所をも尋はやと思ひ候 シテ〳〵恋衣、ほす隙もなき明暮を、蜑のしはざと、人やミん ワキ詞「不思儀やな是成磯辺を見れハ釣舟数多浮つる中に、女性一人小舟に取乗見へ給ふハ、いか成人にてましますそ シテ「さん候是ハ此あたりに住者なるか、けふハ心さす日にて候程に、御跡吊申さん為此磯へに出て候 ワキ「是ハ不思儀成事を承候もの哉、夫人のなき跡にハ印をたて花水をこそ手向給ふへきに、海辺に出てなき跡吊給ハん事心得す候 シテ「実々御不審ハ理りなり、是ハ昔此所に住ける人、此磯へにて身を投空敷成しなり ワキ上カカル〳〵謂を聞は痛ハしや、そもや身を投給ふとハ、扨何故の事やらん シテ詞「其比、大江の道俊と聞えし人、此国に下り給ひしか、賤しき蜑乙女仮にま見え参らせ、あさからさりし契なりしを、程なく都へ上り給ひしかハ、別れを歎き此磯辺に出て身を投る、角とハしらてあま衣、しはしは波にたゝよひしを、あたりの釣人ハ是を見て、驚騒ぎ助けんとしけれとも、下〳〵かいも波間に沈みはてゝ、底の水くづと成て候、扨こそ袖の湊とハ申とかや ワキ上カカル〳〵実哀成御事哉、逆縁なからいささらハ、御跡とひて参らせん シテ詞「実々夫こそ有難けれ、上カカル〳〵更ハ御舟に召れよと、夕波近く指よすれハ ワキ〳〵僧ハ小舟に シテ〳〵法の道上同〳〵打渡る袖の湊の夜半の月、〳〵に、折知貝の郭公今一声を松のかせ、更行まゝに諸人の帰るさ惜き、名残かな〳〵 ワキ上カカル〳〵既に夜も更、波閑にて、月澄渡る折からに、心を静めもろともに 下二人〳〵南無幽霊成等正覚頓證菩提 シテ上〳〵来迎引摂無量寿如来 ワキ〳〵発遣教主釈迦牟尼仏 シテ下〳〵南無阿弥陀仏 ワキ〳〵南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と 下同〳〵廻向の鐘の声澄て、夢ともなく現共、波の干潟の捨小舟に、ほの〳〵と明にけり夜はほの〳〵と明にけり 中入 シカ〳〵 ワキ詞「扨ハ古しへの蜑乙女仮に顕れ、昔を語る事のふしきさよ、上カカル〳〵猶々跡を吊らはんと 上哥「沖津波声立そふる松風に、〳〵、結ばぬ夢の磯枕、袖を片敷菩衣重て跡を、とふとかや〳〵 後シテ下〳〵荒物すこの浦のけしきや、〳〵 一念といへとも必感應す、是を巨海の涓露に入るにたとふ、去にても妙成法の縁に引れて、五障の雲も晴わたり、恵の光曇なき天上に至らん事の有難さよ ワキカカル〳〵不思儀やな風静成沖津なミに、けしたる人の顕れ給ふハ、此日見々えし舟人の、幽霊にてぞましますらん シテ詞「今ハ何をかつゝむへき、其蜑人の幽霊成か、貴き御僧の御法を得、忽仏果をうくるなり ワキ〳〵けに有かたき御事哉、猶々懺悔の物かたりに、無量の罪を滅し給へ シテ〳〵此上ハ何か包まん唐衣、重てむかしを顕ハさんと 下同〳〵袖のよそめも白露の、化し契りと成はてし、昔語もまた今更の思ひ哉 下クセ〳〵実や逃れ得ぬ、会者定離ぞと聞時ハ、逢ハ別と思へとも、化成花の都人、仮の宿りの旅まくら、降暮したる五月雨の、晴間も見えぬ夕つかた、あこかれ行や芦垣の、そこともしらてたゝすめハ、其俤のミたや守、けふハ五月に成にけりと、口号ミ給ひしを、ミつから取敢ず シテ上〳〵急げや早苗生もこそ、同〳〵せめての形見と思へども、思ひ返せハ浦の波立別にし面影を、いつ別るへき身ならねハ、よしや今ハと夕汐に、うき身を沈めけり終に浮ミをしつめけり シテ上〳〵荒現なの、我有様やな カケリ 上同〳〵忘れて過し年月を、〳〵、思ひ出たりくるしミの、海に沈ミ波にうたれて呵責のせ

Osaka Shoin Women's University Repository

めも、隙なき分野、かたるも浅ましや、凡地獄の数々に、焦熱叫喚無間の底に、沈ミはてにしうき身なれとも今あひかたき御僧の御法に、あふむのそてのみなとに紫雲たなひき音楽きこえ、〳〵、成仏するこそありかたけれ〳〵

櫃切曽我

次第へ花の名残も大磯に、〳〵、急ひてうきを語らん 助成「是ハ曽我十郎祐成にて候、扨も鎌倉殿の冨士の御狩の御日限、既けふ頃日に成候、されハ敵の祐経も、御供の由承候程に、我等も忍ひて御供申、いかにもして彼祐経に行逢、日比の本望を遂ハやと存候、又此身にて似合ぬ事なから、大磯の虎の情も流石捨かたく候へハ、立越対面致し、名残を惜まハやと存候 道行へ世の憂を我身に積し柴船の、〳〵、焼ぬ先よりこかれつゝ、煙りて咽ふ胸の火ハいつ消果ん我命、捨る憂世に存命ハ、又比日や忍ふ身の責て慰む心哉〳〵、詞「急候程に、大磯の長か本に着て候、竊に虎の方へ案内申さハやと存候トラサシへ君か為に衣裳に薫物すれ共、君蘭麈を聞なから馨香をせす、君か為に容儀を事とすれ共、君金翠を見るから顔色なしと云り、足引の山隠れなる郭公、聞人もなき音をや鳴覧、詞「是ハ助成の御入にて候そや、荒珍らしや此方へ御入候へ、上カヽルへ去にても身ハよるへなき放れ船、思ハぬ人を焦れ佗、待にかひなき月日をハ助へ重ね着ぬらん二重、我ハ一重に思ふ物をトラへ君の心そ浦波の、此大磯の真砂より 助へ数々多き互の恨ミ、トラへ又ハ情の言の葉に 助へとけつもつれつトラへ片糸の上同へくる程ならハとまれかし、〳〵、一夜はかりハ、憂名たつまし荒浪の末の松山越とも、替らし物を今更に、恨ミ佗なん言の葉の、つもる日数の物語、夜すから語り申へ、今度冨士野の御狩場、けふ此比と申也。扨御供の武士共ハ関八劔の弓取、花をかさり月弓の、八色の箙行藤、名馬を揃へ御狩場を今や〳〵と待居たり、浅猿や我々は御供たにも恐れあれハ、狩場と聞も恨しや 助へされハ敵の祐経も、同へ御供申さぬ事あらし、縦討事叶ハすハ、夏野の鹿の一矢も覘ひて見んとゆふだすき、神の誓ひの末あらハ、争本望遂さらん、去なから我々ハ、痩たる馬の足弱く、弓も力や尽つらん、其上父上も、赤沢山の狩場にて、失させ給ひける物を、夫ハ所も伊豆の奥、爰ハ騒河の冨士の裾、高根の煙り胸くゆる、空に消なん我命、今霄計の名残そかなしかりける トラ詞「御歎き御尤にて候、去なから行末ハ御目出たふ社候らん、御祝ひの門出の御酒一ツ聞し召れ候へ、や、表に人の声高ふして助成殿と呼申けに候、正敷是ハ梶原候よ 助「言語道断是にて参会申ならハ、一期の浮沈是そかし、扨何と仕候へきトラ「童急度存候ハ、此唐櫃の陰に御忍ひ候へ、童一人酒狂して賺して帰し申候へし 助「兎も角も御計らひに任せ候へし 時一セイへ世中に、住所なき日陰草、夏来にけれど時鳥、鳴音も立ぬ、浅猿や 詞「是ハ曽我五郎時宗にて候、扨も冨士の御狩の事、兄助成に告知せ度候間、彼方此方を尋候へハ、大磯の虎の方に有由承候程に、立越対面申さハやと存候、なふ〳〵此屋の内に助成ハ御入なきか、や、人声の聞えしか、某を見て隠れしハ心得す。誠に虎ハ助成と、二世を機関と申せ共、流石流れの女

Osaka Shoin Women's University Repository

なれハ、若こと人に誘ハれて、二心や有覧と、一間間近く立寄て、物の隙より見てあれハ、上カゝルへすハや酒宴の半也と上同へ間の障子を颯と明、〳〵、銚子土器四方へ蹴放ち、大太刀三寸くつろけて、いかに虎御前聞給へ、流石流れの身成共、一度助成と、二世を結ひし其甲斐もなく、正敷誰にか忍ひ妻、此唐櫃の陰に有と腰の刀をするりと抜て、唐櫃二ツにずんと切て危ふかりける有様哉 時「や、是ハ助成にて御入候物を、餘の人と思ひ、唯今の振廻仕候、御赦免有ふするにて候 助「否少しも苦しからす。是も孝有故そかし、扨唯今ハ何迚来るそ 時「さん候此度の御狩場に、敵祐経も御供にて、狩屋も最早しつらひたり、此事しらせ申さん為御有家を尋しに、是にて御目に懸る事、是そ目出度事始め、かゝる酒宴の半なれハ、只一指御舞候へ、某もともに舞申さん 助上カゝルへ実々是そ門出の祝ひ 上地へ舞の袂の数々も、〳〵、廻らす盃の影傾くや、今宵の月の、入さもおしかの狩場の門出、遅参あらハ、悪かりなんと、暇申て帰る山の冨士野の御狩の折を得て、年来の敵本望を遂んと、勇むにかひなき今宵の別れ、名残も鯉の立も立れぬ涙の袂、〳〵、振切曽我にそ帰りける